



●第151号(二〇〇二年十二月)

特集・自治体における政策研究

政策研究と政策評価のあり方

—アメリカとの比較から—

自治体における政策研究

—横浜市における職員の発想を活かした政策研究

—施策研究会からアントレプレナーシップ事業へ—

上野真城子

山口道昭

山崎幹夫

編集部

竹内英樹

田所俊弘

沖津正樹

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

古畑正孝

伊賀千晴・石佛敦子・小野寺紀子・小林明仁・小林康夫・関口昌幸・富岡典夫・古谷朋子

②委託をとおして協働を考える／新しい協働事業の仕組みを探る

中野 創・村田和義・秋野奈緒子・中川久美子

横浜ならではの新しい協働事業の展開を考える

①市民参加のまちづくりから協働のまちづくりへ

(港北ニュータウン荏田南地区の試み)

—江成卓史・田並 静・大倉佳直・吉武美保子

—樹林地・農地をめぐる市民・地権者と行政の新たな関係を求めて

—横浜らしい都心の賑わい創出と協働の文化活動

—榎木誠司・梶山祐美・秋元康幸

—予算編成改革の概要

—対談：都市経営時代の財政制度改革

—持続可能な財政の確立への向けて

—跡田直澄、中田 宏

—都市経営の視点からの行政運営システムの転換

—竹前 大

—地方分権時代にふさわしい地方税のあり方

—地方自治体における課税自主権活用の現状と課題

—松井伸明

—地方の自立を実現する地方財政制度のあり方

—三位一体の改革に関する横浜市の考え方

—三位一体改革緊急プロジェクトチーム

—地方債制度における自由度拡大に向けた取組

—財政局総務課市債係

—水野敦志

—金融市場からみた地方債

—プロジェクトY

—2002 F I F A ワールドカップが残したものの

—①巨大イベントの舞台裏

—久代雅之

—②ワールドカップは終わり、7万人スタジアムが残った

—木村重治

—③市民ボランティアの得たもの

—金平三雄

—④ヨコハマは千載一遇のチャンスを活かしたか?

—アルジェイロ一家との出会いを通じて

—佐藤真起

—⑤サッカーパークの運営と市民スポーツの環境

—神林飛雄史

—赤潮発生への対応

—情報の共有化による迅速かつ統一的な市民対応の実践

—中村裕子

—若手職員のコーナー

—政策形成と職員参加

—江原 顕、津田恭子、草柳祐介、前田慶美

—Q & A

—地方分権はなぜ必要なの?

あとがき

元横浜市の環境科学研究所の職員だった森清和さんが、今年1月に胃がんで亡くなられた。昨年3月に、市役所を退職してからまだ1年も経っていない。

森さんは、都市の自然を再発見し、再生する事業を「エコアップ」という言葉に乗せて横浜から広く全国へと発信した人だ。80年代の初めに、開発から取り残された横浜の原風景である谷戸空間の至る所に、死滅してしまつたと思われていた「はたる」が生き残り復活していったことを、地を這うような調査によって市民に知らしめた。90年代には、学校の中に身近な自然を再生するという発想で、校庭のコンクリートを引き剥がし、地元のおじさんやおばさん、子供たちと一緒に汗をかきながら「とんぼ池」づくりを

広げ、横浜の街にトンボを呼び戻した人である。「エコアップ」や「エコシティ」という気の利いたコピーを、実際の伴わないスローガンとしてただ唄っていただけならば、「環境再生」ということがどんなに美しいビジョンであつても、誰もその言葉には、動かされなかつた。ところが「はたる」や「とんぼ」は、私たち一人ひとりの幼い頃からの家族や友人の記憶と結びついて寄り添うように生きて来た「里の虫」である。彼らは、横浜固有の山野川海のあり

ようと私たちの暮らしとを具体的に結びつけてくれる生ききたメディアだ。難しいことはわからなくても「トンボやホタルの為なら一肌ぬぎましょう」という市民はたくさんいるのだ。だから森さんは、ホタルの里やとんぼ池を自らのビジョン実現に向けての最初の起点にしたのだと思う。そして、それは、様々な人々の繋がりと共に、源流の谷戸や池から小川へと流れ出し、下流の運河へ、そして干潟のある内海まで、森さんが最晩年に辿り着いた「花鳥風月」という私たちの住むこの列島固有の都市ビジョンとなつて、横浜の地に大きく花開くはずであった。

調査季報154号を「読して頂ければわかるように」、横浜市はこの2年間で急速に、現場の職員が自由に発言したり、仕事に自分の志を反映できるようになつてきている。そして、地域には、相変わらず自分の街を愛し、少しでもコミュニティを良くしよう日々活動される元気な市民の方々が沢山存在している。森さんもあと10年は長く生きて、こうした市民の方々と市職員と一緒に活動や仕事をしてみたいなと違いない。

私がまだ20歳の学生だった頃、今の私とはほぼ同じ年だった森さんに、初めて出会つた。森さんが、初対面の私を野毛の飲み屋に連れて行き、へべれけに酔いながら「関口君さあ、市の職員になろうと思つたのならば、出世を考えると市民の方を向いて仕事をしなければ駄目だ」と説教したことを鮮明に覚えている。私は、当時、公務員になろうなどとは、これっぽちも思つていなかったから「うるせえおやじ」だと思つたし、実は、市の職員になつた今でも「350万横浜市民のために」という空虚な言葉にはまるで実感が湧かない。ただ、それぞれが固有の名前と歴史を持つ横浜の彩り豊かなコミュニティとそこで、出会い、ひと時でも同じ志で時間を分かち合った人たちのことは、二人も忘れずに胸に刻んで仕事をしよう。

さようなら森さん。それだけは約束するよ。(関口)

154

調査季報

CHOUSA KIHOU
2004.3

編集・発行
横浜市都市経営局政策課

〒231-0017 横浜市中区港町1-1
TEL.045-671-4087
2004年3月23日発行

横浜市広報印刷物登録
第150331号
類別・分類A-BC060
印刷/株式会社ガリバー

ISSN0387-8899

この印刷物は再生紙(古紙混入率70%)を使用しています



500円(消費税込み)